



TITLE:

故吉村達次先生略歴および業績について

AUTHOR(S):

池上, 惇

CITATION:

池上, 惇. 故吉村達次先生略歴および業績について. 経済論叢 1966, 97(2): 233-237

ISSUE DATE:

1966-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/133115>

RIGHT:

經濟論叢

第九十七卷 第二號

哀 辭

故吉村達次教授遺影および原稿

国債発行と金融政策……………	中 谷 実	1
アージリスの組織理論(1)……………	田 杉 競	16
貸借対照表という用語の創出過程……………	高 寺 貞 男	30
独占価格と生産価格……………	松 石 勝 彦	51

記 事

吉村教授逝く

追悼文 (池上 惇 林 直道 松井 清)

追憶談 (坂寄俊雄 稲垣 武 原田篤己)

故吉村達次教授略歴・著作目録

昭和四十一年二月

京都大學經濟學會

追 悼 文

故 吉村達次先生略歴および業績について

池 上 惇

故吉村達次先生は1916年12月24日、北白川の旧家である吉村小衛門氏四男として京都市左京区北白川仕伏町において出生されました。先生出生の翌年には全世界を震撼させたロシアの10月社会主義革命がおこり、先生は、新たな社会の誕生と資本主義世界の危機と激動の中に生涯をおくことを余儀なくせられたのであります。

先生は朱雀第一小学校、京都一中、第六高等学校文科乙類を経て、日本帝国主義による中国侵略開始の年、1937年4月、京都帝国大学経済学部に入學され、石川與二教授の指導を受けるかたわら、1939年頃より社会科学研究所の読書会に参加されました。この研究会においてマルクス、レーニン等の科学的社会主義の研究をおこない、また、学生の反戦活動に参加した故をもって、1941年1月22日治安維持法違反の疑いで逮捕され、翌年、懲役2年執行猶予3年の判決をうけました。当時の内務省警保局の資料によれば、先生の参加されたこの研究会はしばしば大文字山麓において会合したそうであります。

起訴と同時に無期停学処分をうけられた先生は、1942年5月に復学されたのち、同年9月卒業と同時に兵役に就かれ、翌年ラバウルに出動、敗戦とともに捕虜生活をおくられ、1946年5月に復員されました。

先生の思想と行動を抑圧しつづけてきた日本帝国主義の崩壊と同時に、先生の生涯における第二の時代がはじまりました。

1947年5月、京都帝国大学経済学部大学院に進まれると同時に久美子（旧姓大西）と結婚され、一方では経済学の理論的研究にうち込みつつ、他方では、自らの科学的良心と確信の命ずるままに実践活動にも参加するというきびしい生活に没入されたのであります。

48年2月長女百合子の誕生の年に文部教官となられた先生は、京都大学職員組合の中心的な働き手として、マッカーサー書簡をはじめとする占領軍、日本の支配者の反動的な措置に直面しながら、1948年10月「生産力の主体について」と題する最初の業績を「経済論叢」誌上に発表されました。この業績は戦後のインフレーションと生産力の破壊の中で労働者階級が、生産管理復興を提起したことに刺戟され、労働力を単なる生産の一要素としてのみとりあつかう従来の通説を批判し、「新しき時代の歴史的主体たることによって同時に生産力の最大の主体とならねばならないという自覚」にまで労働者階級が高まらざるをえないということをマルクスの経済学・哲学手稿など最も抽象的な範疇にまでさかのぼって論証しようとしたものであります。

このような研究態度は、労働者階級の実践の方向と自己の経済学研究における対象とを結びつけると同時に、単なるアカデミズムの狭い枠の中で自己の科学的良心すら守り得ないという先生の生涯をつらぬく信念にもとづくものと考えられます。

1950年、朝鮮戦争勃発の年に助教授となられた先生は、京都勤労者教育協会の幹事と京大職組書記長を兼ねるという激務の中で価値論を研究され、51年民主主義科学者協会京都支部書記長を経て、当時の国民的科学運動から多くを学ばれたのち、労働者階級の実態を直接に目で見、肌で感じようという意欲の下に不慣れな経営学を研究しつつ多くの志を同じくする学究にはげまされながら、学生とともに企業の実態調査にとびこんでゆかれます。

1953年から55年にかけて、京都地方産業の危機の実態を主とした調査活動の成果を発表されるかたわら、理論面では、宇野弘藏東京大学教授の「恐慌論」批判に主要な関心をむけられました。先生は恐慌を資本主義の基本矛盾の展開過程であり、この過程における労働者階級の自覚と資本主義の歴史性の認識が深まる過程として把握すべきことを主張され、宇野教授の見解が恐慌を労働者階級による資本主義の歴史性の認識から切りはなし、単なる循環的変動としてのみ把握しようとした点を最もすどく批判されました。いわば先生は、身をもって、理論と実践を統一しようと努力されただけでなく、自己の研究分野においても、理論と実践を分離しようとする傾向に対してきびしくたたかわれたのであります。

このような先生を待ちうけていたものは、アカデミズムにおける輝かしい栄光では決してありませんでした。労働者階級と運命をともにしようと決意した知識人がかならず通らなければならない試練——すなわち、権力による抑圧、偏狭な一部のアカデミズムからの嘲笑、労働者階級の思想が一直線に発展するものではなくて、さまざまな変動と動揺の中で、無数の困難を克服しながら前進するという法則、つぎつぎに湧き出てくるさまざまな雑務等々——、これらは先生の健康を著しく破壊し、1955年中頃から、1957年1月まで著作活動は中断の止むなきに至ったのであります。

苦境にあった先生を支えていたのは、自ら労働者階級の中に入り、理論と実践の統一という問題に挑み得たという確信と、先生の真摯で飾り気のない気風を愛し、苦しみをともにしたすべての人々でありました。

1957年、マルクス経済学の不毛性が宣伝される中で、先生はマルクスの再生産論の立場からケインズの投資概念を批判的に検討され、ケインズが究極においてスミスの vtm のドグマの継承者たるにすぎないことを論証してのち、再生産論の具体化と転形問題の研究を通じ、再生産、実現の諸法則と、平均利潤法則との二律背反、それによる資本主義経済の循環的変動の必然性を論証されました。

この成果は、戦後利潤論の画期的業績として横山東京大学教授の編になる「マルクス経済学論集」にも再録されています。再生産と平均利潤法則または転形問題の一連の業績に拡大再生産における固定資本の更新問題の解明を加え、1961年「恐慌論の研究—循環と変動の理論—」と題して、三一書房から出版され、これによって、経済学博士の学位をうけられました。

だが、先生の当初の関心——すなわち、恐慌を労働者階級による資本主義の歴史的認識過程として把握しようとする関心からは、単なる循環的変動の説明にとどまらず、資本主義から社会主義への移行と、資本主義の循環的変動とが統一的につかまえられなくてはならないという問題がどうしても解明される必要がありました。循環または円環的運動の法則と移行または、より高次の社会への発展の法則とを統一的にとらえるという問題は、経済学の全体系の根本をなすものであり、理論と実践の統一という問題を経済理論の中に内在化させる上で決定的な問題であり、これによって、宇野弘蔵教授によるところの論理と歴史を切断し、理論と実践を切断する経済学方法論は批判し尽くすると判断されたようであります。そこで、先生は、健康をおびやかすさまざまな障害に悩まされながら、資本論における本源的蓄積論と、レーニンの帝国主義論を取りあげられ、経済学における抽象が、単なる一般化や、実用性一般にもとづくものではなくして、労働者階級の実践という立場からの一般化であり、抽象でなければならず、またかかる正しい抽象は、形式論理的で、固定的、閉鎖的な経済学体系ではなくして、資本主

義社会の諸矛盾が労働者階級の頭脳へ反映するとともに、弁証法的に、変化、発展、運動する開放的な経済学体系のみをもたらしことを論証されました。いわば、実践の必要にもとづく抽象を媒介として、抽象と具体、論理と歴史、理論と実践は統一され、科学的な経済学体系が確立されるとする主張であって、1965年6月「経済論叢」誌上に発表された「経済学における理論と実践」はこの見解の一つの頂点をなすものであります。この経済学方法論は、同時にマルクス経済学の体系における国家の問題に土台、上部構造の相互作用という観点を導入させ、国家独占資本主義の分野における業績を生みだしました。

1960年の日米安全保障条約改定反対の運動を契機として、先生の科学者としての社会的活動も多彩となり、多忙をきわめてきます。

1957年の職組委員長就任を再出発のスタートとして、63年以降、京都労働者学習協議会理事、民科京都支部経済部会責任者、日中友好協会会員、64年には、訪中学術代表団の一員として中国の社会主義建設の実状をまのあたりに見学され、第11回原水爆禁止世界大会国際会議日本代表団員、京都原水爆禁止科学者の会代表委員となり、昨年11月には日本科学者会議の発起人となりました。

新たに到達した科学研究の成果は、先生が研究の出発点にあって構想され身をもって行動された理論と実践の統一という問題をより高い次元でつかみなおしたものであっただけに、新しい経済学体系の確立と、更に確信をもって多彩な実践活動を開始された。その矢先に、過労は先生の健康をむしばみ、脳出血で昏倒されたまま遂に不帰の人となられたのであります。

たえまない怒濤と狂瀾の時代にあって、先生の生涯をつらねていたものは、何よりもまず理論と実践の統一という問題を科学研究の中に内在化させようとする信念であり、その成果としての経済学における貴重な業績であります。

つぎに、この科学研究から得られた結論を能う限り自らの実践活動への参加によって主体的に貫き通そうとする粘り強い態度であります。

最後に、日本の思想界の一大変動の中で、苦悩し、動揺しつつも、遂に終始人民を信頼し、学生を信頼し、一時的に少数とみえても自らの信念を守り通されたことであります。

そしてこれらの事実こそ先生をすぐれた研究者であると同時に、すぐれた教育者たらしめた所以であります。

先生がなくなられてから机の上に未完成の書簡一通が残されておりました。おそらく12月末に書かれたと思われるこの書簡には「科学者組織の根本問題は、やはり科学の創造的發展という問題です。創造的發展の根本が科学と人民の結合という点にあること、

ここで進歩的の科学者と自称する人がおたおたしてしまうのです。やはり大学という生活領域では、感覚的には支配階級によりファミリーなものを感じるわけで、『人民』は異質なものではないことが一番問題です。」と記されています。

生涯を通じて人民との結合を望み、人民とともに苦悩し、新たな到達点にたちながら49才という若さで急逝され、本年1月1日づけをもって教授に就任されたにもかかわらず、経済原論の講義を遂に一度もおうかがいできなかったことは私ども後進にとりましてもいいような悲しみであります。

しかしながら先生の残された思想と業績とはいつまでも私達をはげまし、導いて下さるものと確信を致しております。

以上、故吉村先生の御指導を仰いだ研究生一同を代表して、吉信、山下、重田、杉本、西野、稲垣、津波古、西田、浪江、松石、小野、池上の共同討論にもとづき、先生の略歴ならびに業績を報告させていただきました。